

コウヤマキさし木苗の育成方法について

農林水産総合技術センター林業試験場 特用林産部 濱田さつき

〔はじめに〕

コウヤマキの苗木生産は主に実生苗によるが、山出しまでおよそ10年程度かかることから、生産期間の短縮が課題である。また、花木としての商品価値の高い形状を持った苗木が求められている。これらの課題に対して、生産期間がより短く、優良品質を受け継ぐことのできるさし木苗に着目し、その技術向上を目的に行った試験のうち、今回はさし床用土、さし穂枝齡、発根促進剤の施用方法について報告する。

〔材料と方法〕

以下の試験において、さし床は、内寸15.5 cm×24.0 cm×高さ15.0 cm、厚さ2 cmの発泡スチロール箱（以下「箱」という）を用いた。灌水は、毎夕1回箱の底から水が出る程度行った。

① 用土種類別の発根状況を調べるため、市販の園芸用土6種類（鹿沼土・赤玉土・バーミキュライト・パーライト・日向土・川砂）を使用してさし木を行った。さし付け日は2011年4月27日で、1箱7本×各用土3箱ずつさした。発根状況の調査を2011年10月18日～25日に行った。

② さし穂に適した切り位置について調べるため、さし穂切り位置を1年枝下、2年枝上、2年枝下、3年枝上、3年枝下の5カ所に設定してさし木を行った（図3）。さし付け日は2010年4月27日で、箱に鹿沼土を入れ、1箱6本×各区3箱ずつさした。発根状況の調査を、2010年11月30日～12月7日に行った。

③ 発根促進のため、オキシベロンの粉剤と液剤を穂先に塗布し、さし木を行った。さし付け日は2010年4月15日で、箱に鹿沼土を入れ、1箱8本×各区3箱ずつさした。発根状況の調査を2010年11月19日～29日に行った。

④ 発根促進のため、オキシベロン液剤の40倍水溶液を、さし木から1カ月後に1回、1カ月後と2カ月後に1回ずつ計2回、1カ月後と2カ月後と3カ月後に1回ずつ計3回、各さし穂の根元に1本あたり10mlずつピペットを用いて散布した。さし付けは2010年4月16日で、箱に鹿沼土を入れ、1箱8本×各区3箱ずつさした。発根状況の調査を、2010年12月13日～17日に行った。

〔結果と考察〕

① 用土種類別発根状況について： 図1より、発根率は、鹿沼土とバーミキュライトが71%、パーライトと川砂が61%、赤玉土が38%、日向土が24%であった。赤玉土と日向土は、発根率が他の用土と比較して低くなったが、その原因として、これら用土が中粒であり粒が他の用土と比較して大きかったため、保水性が低く、乾燥したことが予測される。図2より、バーミキュライトの箱ごとの合計根重量は平均12.3gと最大になり、ここで用いた鹿沼土以外の場合の平均値間に有意差がみられた。

② さし穂切り位置の枝齡別発根状況について： 図4より、発根率は、設定した切り位置の

違いによって有意差は見られなかったものの、切り位置の枝齢が大きくなるに従って発根率平均値が高くなっており、3年枝下の発根率（58%）は、1年枝下の発根率（25%）2倍以上を示した。ここで用いた3年枝下のさし穂長さは、平均 22.6 cmであった。

③ オキシベロン穂先塗布による発根促進効果について： 図5より、粉剤では効果が見られず、液剤の原液塗布では、発根抑制がみられた。

④ オキシベロンさし床散布による発根促進効果について： 図6より、散布回数が1回の場合より、2回または3回施用した場合に発根率が高くなった。2回散布の発根率（67%）に関しては、1回散布の発根率（33%）との間に有意差がみられた。

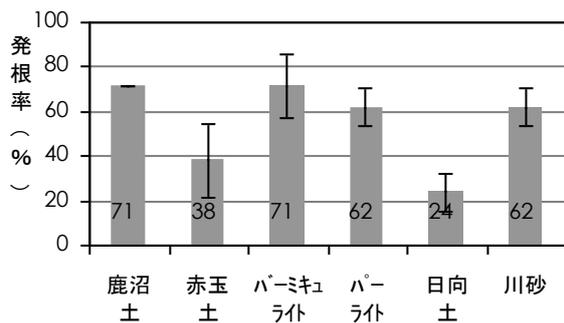


図1 さし木用土の違いによる発根率の比較

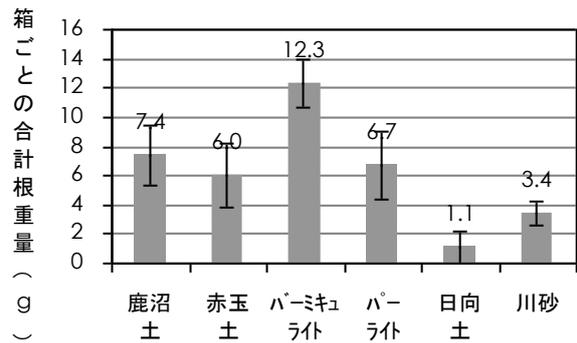


図2 さし木用土の違いによる根重量の比較

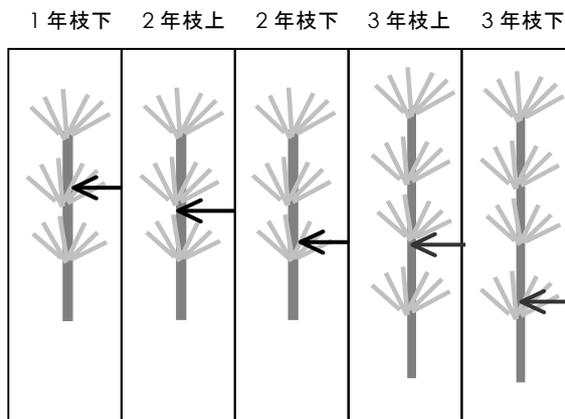


図3 さし穂の切り位置

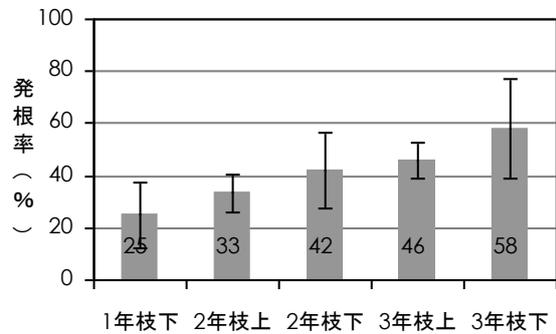


図4 さし穂枝齢別発根率の比較

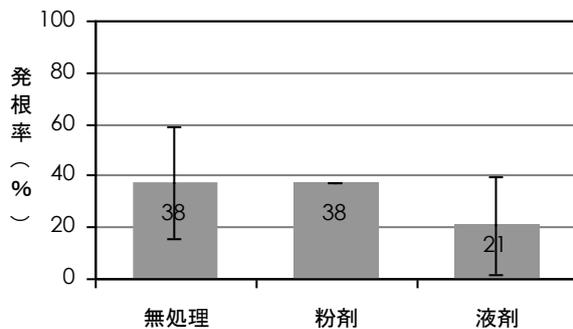


図5 オキシベロン穂先塗布による発根促進効果の比較

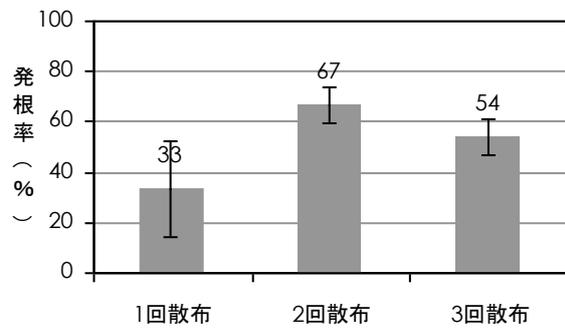


図6 オキシベロン水溶液さし床散布による発根促進効果の比較